



松久堂集

19
俳諧文庫

二十四

^ 5
1139
19



利 5
1139
卷 19



微なるも架題の形多々太く入隠す
多るより見ると多し一之毛の周羽鳥
半海をぬれ其書を二布一尾逸則也
よきものを西に止し旋子寸と以て毎
戸田川を越えたるは戸田と出ると稻心
推して多し言はれつゝ好むがま定むるは
心より好むとて伊勢の崎より了海

板井村より舟をり 舟運りましぬ
あつるをく 守備をく 惜と公遊りと
公らせると言葉を舟より流し是を
本より流るゝ法あり 勢以て社徒
の志しものごと 其舟 記しと送りぬ

四月十五日

舟宿あり



辭 世

行年のごとく 拙りいなり

半海雲位

そと申く ちかとの尾

繁弘

志候り しまゆり 又たら

文河

このころ ちかとの船 ちか

案詠

河、たれを ちかとの 舟

竹立

新 殖買の 舟

松室

糖業のあはれはうらたえは

青我

きりくきりきりきり

楓山

根うりてふふふふふ

琴正

ふりふりふりふり

景山

陰陽のふりふり

桂石

ふりふりふりふり

言之

世になつてきつて

吟米

海つづつれを

花代

くみ井の浦や昔の

寿延

なつたまひま

松存

ひまひま

為流

たつたまひま

巴静

なつたまひま

花友

血とあつた

佳香

あつたまひま

葉野

あつたまひま

山水

陸の船一掃しやれとてつゝ

蓬唯

ふはたけたりまきとる種もた

桂周

春儀 柳社にほしのゆめられたる

茂逸

一磨乃月夜切る小葉 名うへ

西来

新玉のうららかなるもよもすらん

閑室

深川の年ハちやうもさのこ

一方

月も出ぬ雨もたしぬ暮さの

丘掃

あまのやら舞 未鬼の戸

禾漸

ナノウ

杜ののり 多穠 柳の多す 暮春

界山

書とらるゝあゝ 歌一の冬

謙山

修の者まほしくともをひの穢梅

梅志

きつてをみまると 初のお清 滝

南山

散るる花をよきたしうに 終るる心

とち雅

行くと申ふ屋ふ志のよき 柳

半校

各述悼章 古書畧

たつたつとや 涙よき申る 野邊のち	文河
たつたつとや 涙のちり 岸たより	青我
西條のついで 解まじく 力も 拵るなり	埴城
驚くや 一帯は 浪る 疾のち	松存
ききし 橋のつりも 信し けれり	一静
月之原を 河と 思ふも 織りし	叶立
たつたつとや 涙平 是れなり 初日乾	巴静

跡りし ちたは 哀進なり 妻の居	茂逸
是れを 見る 目も 花衣	一痴
旅先の 思ひ 旅を 暮さく	峠知
一帯り 居の 流れ せし 候り	高湖
雲よ 似て 流るる 人の 身なり	素城
ゆたの 乾生 録を 啼く 蒼う	草眠
を みる とも 思ふ ちり 本業	亀友
西方の 傳へ ちり 花の ち	萬笑善

紅よりとちり落りし春の風の
 佳香
 とくくとくは流るる春もつる雪の舟
 香林
 春の月入る思案の 飾りる危
 西来
 驚かす 柳よむきけり 高松の形
 素外
 そまゝとてふる雪も流るる春の雪
 玉水
 融けゆく 雪も流るる ちりり 柳も春
 竹林
 流るる 申く雪も浄土の心ゆく
 雪園
 梅柳とちりり 向るも春の言
 霖山

眼を閉るる 雪の心ゆく 春の言
 丘虎
 雪の中をゆく 春の言 浄土の面
 琴心
 雪の中をゆく 春の言 浄土の面
 花友
 ちりり 雪も流るる 春の言
 壽延
 春の言 流るる 春の言 春の言
 謙山
 春の言 流るる 春の言 春の言
 梅克
 大雪の 春の言 春の言 春の言
 松密
 梅の 春の言 春の言 春の言
 吟米

神よのうらやまのたのしみ

いづれも実時をぬのけはよおき

眠りしとけしきよふらふらふの神

夕暮や書のそと遠くも世のなほい

七七日の忌

心とちむや清きこゝよきまはし

何とよあふ日びらちやむや意のわけ

結ぶよなきはれゆめをよめる歌

神木

神木

多摩郡

為流

神木

案詠

桂碩

軒龍

舟の船をささげしきくらう歌

実もむまひたすひぬき乃たす七か

師 師まのうらやまきのみおと

思ひしきまも少くやありのを

日あちなりぬ

とひ何く又被せすふあをさ

葉らりの心表むも帝一ふさ

南山

閑室

神木

神木

神木

繁弘

半校

東京

垣根まほろふつららの二葉のつゆ 等哉

本河のゆを以幸あふれ上生う都 妻湖

秋ふまきいゝるのまや 池の鴨 鶯笠

雪のちさうなまのゆ 五雀

雪のちさうなまのゆ 完成

眼定まほろふつららの二葉のつゆ 秀音

うらまきいゝるのまや 餅筵 詩竹

雪のちさうなまのゆ 山月

人の指端のまよひにうらまきいゝるの川 梅園

多秋のまよひにうらまきいゝるの川 之引

立しとまよひにうらまきいゝるの川 公木

妻のまよひにうらまきいゝるの川 笠舟

撫ゆらうらまきいゝるの川 桑葉

妻のまよひにうらまきいゝるの川 東島

妻のまよひにうらまきいゝるの川 潭龍

瑞しとまじりてか、新也梅子月

松江

葉草の此りつりよー昔ーより

後漢

友昇

初より此より所の勢も伸より

佐助坊

柳岡とも又言は深き朝

完和

若るるや、初言まの、ふ日初る

相模

雪燕

埴や、味ゆき申の外、切と

芥舟

雪の裏、何事よと思ひたり

葛雄

ふいと来りて、時ゆき花より

保良

守節

雪のさりて人又よ、年の市

甲斐

廿良

東雪や、庭より風多くとる

白隣

梅のさりて人よ、おの松

道雄

三竹の、朝ゆきあや

後漢

夏泉

雪の、入と音の、まふなり

五席

川原よ、夜たつぬ、おのり

三河

蓬宇

里出、しとる、おのり

後漢

徂康

名月や、つりて、おのり

素陽

燈をきく四人もくろく柳

杜若

譲りゆく春の柳門喜傳

芹舎

朝霞のきくきくきくきく

湖水

志くけくけのきくやんや

周象

海多きく、神く握きか

竹斎

山川や枯のきくりも

抱清

二人きく、ゆきも、ゆきも

芳桂

屋敷のきくきくきく

十竹

面をく屏風のきくきく

伊藤

鶯居

黄をく、きくきく、きく

由江

素足

早稲のきく、きくきく

善秀

穂揺り、ゆきく、きく

稻守

又、きく、きく、きく

長門

梅宿

浮城、きく、きく、きく

得斎

今、朝、ゆき、ゆき、ゆき

如安

雪袋

卯のきく、白根、きく

桃守

常々たる喜の秋をよしの春

城中

桂南

名目や唇紅く群の春を

可兆

月と結露のちのちの涙を

精雅

明香や 松子のうへに

松鼎

静子 小坂のちのち

眉丈

若子のかや 何ぞうへに

如三

さくらゆのちのちの柳の

湘山

梅郷のおぼろのちのち

青阜

山の雲のちのちの水田の

美石

けのちのちのちのちの

魯雪

雪のちのちのちのちの

山林

美介や 星と雲のちのち

桂下

水ぬも 春のちのちの

茶丈

緋つみや さまのちのちの

雲合

夕も又 春のちのちの

霜村

梅のちのちのちのちの

霜石

薄墨より柳を巻ぬ 春の後の

行波

琴金

居る山より所 自掃の 掃的り

月窓

春の山より 春の井井の 水より

雲老

何事より 何事より 何事より

庭雨

何事より 何事より 何事より

二石

福より 福より 福より

巖

東の山より 東の山より 東の山より

朱淵

出歩りより 出歩りより 出歩りより

龍孫

是の山より 是の山より 是の山より

秋后

晴雲

虫啼や 虫啼や 虫啼や

梅園

浦より 浦より 浦より

青曉

曉より 曉より 曉より

旭扇

名より 名より 名より

佐治

延神

花の山より 花の山より 花の山より

芥州

水より 水より 水より

守水

木表より 木表より 木表より

螢處

新米の肥え 啼たり 秋の聲 已郷

又夕の念念の外に 雪土

つる 藻淵

浮る 唇をき 唇 唇風

三 笑少人 唇風

足袋ぬい 夏静

そよ 南琳

大勢と力り 芳秋

♪ 鳴るうき 菜之

鳴るうき 葉月

若るうき 清良

連ハ 對 蝸

若るうき 芋鳩

二三粒 神霞

一 可 唄

藪入のうららにさる。松の那
 折のゆや 扇のゆけうる座の所
 浮る糸柳よ折のたつ日の中
 海さや 雲のまなく鯛の色
 矢一筋おろし流るる春の川
 帝のりおとつる障のたきうさや
 風やうくおさつる大根汁
 冬播よま日南りり志るうらま

乙事女
 美静
 尚之
 年山
 唯一
 素斎
 斗法
 釣月

誰うそも怒るる松のうさや
 秋のうのまたまらう梅の心
 一扇り花の地紙や 雲の梅
 市もまら海原を引けす灘の月
 空にまら 雲のうらまら秋の色
 横向の花うらまら 梅の心
 去る雲もまら 梅の心
 眼のうらまら 秋の色

有柳
 曾木
 俄友
 静湖
 月雄
 白左
 義村
 知秋

春なきくさるる花やまきさうたけり瑞平
 面をくまのほろろれり月つを
 阿ふくろしあふさるりの糸一木
 咲くまのいほくまぬきよしゆり花
 若のぬけ世をまれくろし柳自云
 孫はまきさるる木ののりきや岸のゆき
 此のうたやまのりさるるまも阿の
 ちの居や 弥よりあまあこの山
 真可
 蛙吟
 吳羊
 牧雄
 幻史
 指一
 知水
 酉山

ちのやうふをたをさるる 曉
 ぬけや 夕日の結し 赤城山
 霧のまきさるる一葉のりさるる 瓶の友
 阿のぬけまきさるるあまのりさるる 水
 ちのりさるるあまのりさるる 為神の縁の上
 坊のぬけまきさるる日さるるけしるる 中
 娘のぬけまきさるるあまのりさるる 巨海山
 夕山の匂い阿のりさるるまのりさるる
 山 曉
 玉 桂
 玉 斎
 庭 卜
 雲 淵
 琴 和
 東 川
 文 雄

雲霄
 甘穗
 蘆溪
 嫫翠
 磷舟
 茶醉
 三三
 峨眉



梅白
 西嶺
 谷朗
 穢哉
 光因
 椿盆
 竹巢
 柳考

中をききさ方なりそらけり葉少き水
 庭より静し林の静や水仙花
 燈うつらふくすくす一松の末のくす
 言葉草の心引あやむ妙香や
 〇 移るよや隣をくひの小を持
 香鼓の心静く造る水ささくや
 黄くもれ口くゆかむさくさくや
 琵琶色すくもる葉あはれ葉の小林村
 慕漸 梅洲 井蛙 文古 露井 燕堂 林遊 無涯

如れを色にそらけり月水好暗き
 雲霧のくすくすや昔の恋心
 雲みくすくす清水のそらけり
 山をききさ方なりそらけり
 馬のくすくす静し一葉のくすくす
 体はひり方まかすくす日水や
 ちうらうらうと静しあはれくすくす
 〇 したくすくす一葉の葉少き水
 如翠 牝雨 一考 省山 浮秀 遊園 慶美 波美

① 三つしつれ 日暮くえん 山の森
 五 秀
 志心のよやく ね 兼 耕園
 三つ 居れ くるま あり きの山
 卯 弓
 一人 あり くら 白く 秋の鳥
 文 水
 秋の 樹ま くるま あり けり
 終 知
 終 啼 や ね 立 くるま 朝けり 兼
 閑 窓
 ② おく 鐘 撞 けり と まつて くるま あり
 兼 窓
 ③ 山 風 も 鳴る の き も あり 兼 衣
 柳 園

兼 衣 守
 乙 瓢
 秋 盛
 亀 好
 兼 三
 秀 斎
 高 山
 三 菖

○

掛登り橋をさるりし 細流下

高柳

○

其より傳へし 了の味 喜のり

枝形

○

立あよ 月をまたし 橋下

春水

○

さうとつらんや しのぶの 子あや

平三

○

鉢植の 梅も通し 春の節

三橋

○

懐舞 中つらつら 晴る 山のま

良扇

○

面をく 括み 甘きや 初時

一方

○

眼を 一ふし ねい 埃舞 人の 暇

芳水

Handwritten bleed-through text from the reverse side of the page, including the name 'Shimoda' and other illegible characters.

○

望き 舟にゆくりの 行も 百のち

眠海

○

射年 一のふれ 小の 高の 糸く

木定

○

障子 借る 糸の 多き 借る 舟

晴雲

○

うら せう かな かな かな かな かな

近裔

○

鐘き くの 里を 信る 林の くれ

花代

○

海を 舟の 影を 括る 舟

埴岡

○

日ほ くりの 影を 括る 舟

禾州

○

舟の 影を 括る 舟

嘉定

旅人の大木路のくさるまは日なり歌山

急と急なまきうしをみ磨り山水

の州の戸や煙りも秋の色もまき楓山

残雪の捨ひ人しりりまの山景山

夜櫻のまきうし人のちりまなり言之

柔峰や急も繕よ口もまきうし蛙陌

うしかなは日も下りの中の時く日なり 萱畦

まきうしあまのまきうしあまの子ま

糸しちや照りのしを野のまきの色

や日るのまきうしつるも日なり

まきうしあまのまきうしあまの子ま

まきうしあまの子ま

植るあまのまきうしあまの子ま

まきうしあまの子ま

時代

まきうしあまの子ま

まきうしあまの子ま

まきうしあまのまきうしあまの子ま

まきうしあまのまきうしあまの子ま

まきうしあまの子ま

